

ウォール・ストリート日記

# ウォール・ストリート日記

---

アメリカ

---

ビジネスマンの

---

昼と夜

---

寺澤芳男

## 寺澤芳男

昭和6年栃木県生まれ。昭和29年早稲田大学政治経済学部卒業後、野村證券株式会社に入社する。昭和31年フルブライト留学生としてアメリカに渡り、ペンシルヴァニア大学大学院・ウォートンスクールにて学ぶ。以後通算16年をニューヨークで過ごす。滞米中は野村證券ニューヨーク支店勤務をへて昭和47年米国野村證券(NSI)社長、昭和57年同会長。この間、昭和48年にニューヨーク名誉市民、昭和56年には日本人として初めてニューヨーク証券取引所正会員となる。昭和62年1月に帰国し、野村證券副社長として現在に至る。趣味は水泳、ゴルフ、小唄。56歳。

## ウォール・ストリート日記

昭和六十二年十月二十七日 第一刷発行  
昭和六十三年四月十四日 第九刷発行

定価——一〇〇〇円

著者——寺澤芳男 （検印省略）

発行者——石川晴彦

発行所——▲株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二一九 郵便番号一〇一

振替 東京二一八七五二七番

電話（編集）〇三—二九四—一二二九

（販売）〇三—二九四—一二三三

印刷所——凸版印刷株式会社

© Yoshio Terasawa 1987 Printed in Japan  
ISBN4-07-924359-6

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。  
お近くの書店か、本社へお申しください。

ウォール・ストリート日記

# ウォール街を真に生きた人

ソニー会長 盛田 昭夫

寺澤氏は、アメリカを、マンハッタンを、そしてウォール街を真に生きた数少ない日本人である。それは何も彼の米国在任年数が十六年の長きにわたったからではなく、また、彼がその三度にわたる在米期間中に、米国における野村證券の歴史的転換点に居合わせたからだけでもない。それはむしろ彼のアメリカ「原体験」とその受け止め方に基づくものが大きいといえる。私が彼の処女作『ウォール・ストリート日記』を読んで最も強く感じたのはそのことである。

私がボーイングのストラットクルーザーで初めて米国を訪れた一九五三年八月から約三年後の一九五六年六月、彼は氷川丸でフルブライト留学生として米国にわたった。彼も私も初めて見るアメリカに驚き、圧倒された点では全く同様である。「見るものすべてが驚きの連続だった。したがって『日本とはこんなに違う国だから、そこに住んでいる人たちの生活や考え方も違うだろう』という気持ちに素直になれたのである」と彼も書いているし、私も『メイド・イン・ジャパン』に「私はただ、ただ、圧倒された」と書いている。彼も私もそういう意識でアメリカ人と付き合うことを心掛け、努力してきた。

「原体験」とも呼ぶべき最初の出会いが強烈であればあるほど、相手を理解しようとする努力も相手にわかってもらおうとする努力も意識的に生まれてくるものだと思う。相互間に「違い」が存在することを意識することから、理解も生まれてくる。相手の立場を尊重し、自らを律する様子、さらには、そうした姿勢に裏打ちさ

れた認識の座標軸の確かさは、軽妙な筆使いの中にも読む者にしつかりと伝わってくる。

天性の根あきに加え、流暢とはいえないが説得力のある英語を操り、倦むことを知らない努力によって、Terry Terasawaは、単に有名人となるだけではなく、多くのアメリカの友人を得た。彼はアメリカ人とFirst Nameで呼び合えるほどのIdentityを築いた数少ない日本人経営者の一人である。

彼と私の最初の出合いは一九六一年初頭だった。当時、ソニーは日本企業としてのアメリカにおける初の株式発行をADR（預託証券）方式で計画しており、彼は、米国のスミス・バーニー社とともに発行の共同幹事となった野村證券の担当者であった。彼が第四章「ニューヨーク奮戦期」に記しているように、一九六一年六月に発行されたソニーのADRは確かに時代を画するものだったといえる。日本企業として初の米国での株式発行である上に、日本企業初の株式時価発行であったこと。さらに、登録届出書は米国流の連結決算方式（これも日本初）により米国のSECに登録せねばならず、届出書には極めて日本的な商習慣・契約について、重要なものについてアメリカ人が納得できるよう説明しなければならなかった。野村證券は、共同とはいえ日本の証券会社として初めて米国における株式発行の主幹事になることとなった。振り返ってみれば、一九六一年はソニーと野村證券の『国際化』の重要な一里塚となったのだが、この仕事は私にとって最も困難な事業の一つであったし、彼にとつてもそうであったことと思う。特に新婚旅行から帰った翌日から数カ月間にわたる朝帰りに甘んじなければならなかった奥さんには、大変申し訳ないことをしてしまったと思っている。

私が彼と識り合って、既に三十年近くになるが、私の友人の中でも彼は格別にユニークな存在である。底抜けに明るく、あくまで気取らず、肩を張らず、茶目つ氣たっぷりな人柄と、温か味のある人間性は、人をひきつけ、説得力を持たずにはおかない。私自身、彼に教えられたことも、励まされたことも多く、まことに得難い友人の一人である。

ウォール街を真に生きた人 ソニー会長 盛田昭夫 2

第一章 わが街ニューヨーク 7

ニューヨークのある一日 8

ハイヒールとパーティー 16

アフターディナー 19

マイ・イングリッシュ 22

氷川丸とジェット機 30

五十五歳の誕生日 37

夜の銃声 45

女と男 48

第二章 ぼくのウォール街 57

ウォール・ストリート・ガイド 58

### 第三章

#### ウォール街の女たち、男たち

111

ニューヨーク証券取引所 68

ファーストネーム 73

マンハッタンの週末 76

ちよつといい話——アメリカ版—— 86

バーベキューと都々逸 94

カフェイン抜きコーヒー 97

ニューヨークの匂い 100

病の友と独立する友と 107

日本とアメリカの文化摩擦 112

ウォール街の女たち 121

ウォール街の男たち 129

「人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」 137

ニューヨークを一つにしたメッツ 145

東洋娘のマネキン 148

アメリカのカップル(夫婦)文化 156

結婚とは—— 164

## 第四章

### ニューヨーク奮戦記

澄んだ目、濁った目 173

スキンシップ・コミュニケーション 176

女房と大統領は別！ 183

あまりに日本的な 186

日本からやって来た日本人 189

玉虫色 194

グッド・バイ 197

ニューヨーク奮戦記 206

国際人——思い出の人々 246

ぼくの見た日米経済摩擦 256

あとがき 270

初出一覧 273

ウォール街周辺地図 274

装丁●渋川育由

## 第一章

# わが街ニューヨーク

## ニューヨークのある一日

あさ

目を覚ますと、クツ、クツと妙な、鳥の声とおぼしきものが聞こえる。隣のビルの間につき出ているエアコンの上に、鳩が巢を作っているらしい。ニューヨークも、東京風にいうと山の手のこのあたり（五番街、八十丁目）になると、鳩がいっぱいいる。

ベッドから、するりとぬけ出し、顔もあらわず、齒も磨かず、ただズボンとワイシャツと上衣を身につけ、アパートの前で待つ車に乗る。すでに車の中にいる医学博士、ジョージ・永松先生の横に身を寄せ、空元氣を出して「グッド・モーニング・ジョージ」と、大声を張り上げる。ちょうど、あさ六時二十分。

ドクターと一緒に、セントラル・パークを縦に（北から南へ）走り、ニューヨーク・アスレティック・クラブ（以下、NYACと呼ぶ）へ向かう。眠い目にも六月の新緑が、瑞々しく匂うように美しい。文字通り、老若男女が、腰をふりふり、頭をふりふり、ジョギングしている。

NYACには二五ヤードの室内プールがある。男が服を脱ぐ時、最も時間がかかるのは、ワイシャツのボタン六個をはずすこと、カフスボタンをはずすこと、Tシャツを頭から脱ぐこと、そして体を折り曲げて、靴下を脱ぐことである。ぼくの場合、ワイシャツのボタンは二つしかはめてないし、カフスははずしてあるし、Tシャツは着ていないし、靴下ははずす素足に靴をはいているから、一分とたたない間に素裸になれる。

歯ブラシ、歯磨きチューブ、安全カミソリ、水泳のメガネを掴み、そばに積んである真っ白い大きなタオルを腰に巻いて、シャワー室に入る。シャワーを浴びながら口を開けて歯も磨いてしまう。シャボンで体をきれいに洗ってから、水中メガネをしてプールサイドに行く。六人ぐらいが泳げる広さで、たいてい一つのレインは空いている。

水泳パンツはつけてはいけないうちになっている。理由は、不衛生だからだそう。きれいに洗った体で、スポンポンで、二十代の屈強な男も、七十代のよぼよぼのじいさんも、泳いだりプールサイドの長イスにごろごろしている。慣れるとこんな気持ちのよいことはない。これを英語では“BIRTHDAY SUIT”なんて言い方をする。「生まれたまんま」ということなのだろう。メンズ・クラブ（男だけのクラブで女人禁制。食堂だけは女性も入れる）の特権かもしれない。

以前、日本のどこかのTV局が、「ザ・ワセダ」という特集番組を放映し、その中で早稲田と慶応の学生を比較して、どちらが銭湯で、前を手拭で隠すかという、まことにバカバカしい

ことをやっていた。答えは早稲田、なぜなら、ウチ風呂に慣れている慶応の学生は案外平気だという。バカバカしさを通り越して少々腹が立ったが（というのはあくは早稲田出身なので、他人事とは考えられず、のめり込んでしまったわけ）、NYACでは七〇パーセントが前を大きなタオルで包み込んでいる。

けさは、クロールと平泳ぎで二十往復した。一〇〇〇ヤード泳いだことになる。途中で休まなかったが何と五十分もかかった。ドクターは、悠然とクロールで泳いでいる。今年の七月で八十一歳の誕生日を迎える。シアトル生まれの日系二世でワシントン大学工学部卒業後、エンジニアとして、ゼネラルエレクトリック社に数年勤め、それから医学校に入って、外科医になった。ニューヨーク医科大学泌尿器科の教授も務めた、アメリカ人の間でも有名な医者である。一昨年瑞宝章勲二等を日本国天皇からもらっている。

泳いだあとサウナに入り、髭をそり、ゆったりしたダイニング・ルームで、ブレックファーストをとる。フレッシュ・グレープフルーツ・ジュース、ヨーグルト、コンフレックスの上に輪切りにしたバナナをのせ、ミルクをじゃぶじゃぶかけたもの、それに、トースト。このごろ、コーヒーがいやになり、紅茶党になってしまった。

ドクターから、三、四十分医学の講義を受ける。大学の先生だけあって教え方がうまい。そのため英―独―日対照医語彙を必ずカバンの中に入れてある。

## ひる

アメリカのビジネスマンと、ゆっくり話したかったら、ランチの約束をとるべきだろう。朝八時半から十二時まで、二時から五時半までは、秘書への口述筆記と、電話の応対と、来訪客の接待で、手いっぱいである。来訪客は、やむをえない場合だけで、ほとんどの用事は電話ですませる。「お電話で恐縮ですが……」という表現は、英語には翻訳できないのではなかろうか。

ランチになると、今度は、ゆったりする。いきなりビジネスの話をするのは野暮である。オープンング・トークというのが必ずある。昨日プレイしたゴルフの話でもよし、ワイフや子供の話をしてもよいし、要するに他愛もない軽い話をする。前座である。

料理が運ばれたころ、真打ちに入る。今日はコロンビア大学の教授と話した。

日米経済摩擦の話。一九八五年の一年間で、日本がアメリカへ売ったものと、アメリカが日本へ売ったものの差し引きが三六〇億ドル。アメリカ側がそれだけ買ひすぎた、あるいは日本が売りすぎたというので問題になっている。

日本の製品が、かなり自由にアメリカで売ることができるようアメリカのマーケットはオープンされている。しかし日本のマーケットは完全にはオープンされていない。ケシカラン。

というのがアメリカの怒りである。

たとえば、日本のマーケットをオープンしても、肉はアメリカよりオーストラリアから入って来てしまおうし、日本が左側通行と知りながら左ハンドルの自動車を売ろうとしたり、日本の小さなアパートに、あのドデカイ冷蔵庫を入れさせようとするアメリカのやり方ではしょせんだめ。せいぜいうまくいっても三六〇億のうち三〇億か四〇億しか改善の余地なし。というのが日本の言い分である。

いきり立つアメリカ側にとっては、この日本の弁明に怒りをますます燃え上がらせ、神経を逆撫でされている。

エー、エー、どうせそうでしょうよ。でもね、日本側はマーケットをオープンしても、そんなに痛手が多くないというのならとにかく四の五の言わずオープンしてみてください、ということになる。

日本、アメリカ、EC、その他の四人がマージャンを打っている。日本だけに点棒が山と集まる。他の三人は、自分たちの技術が下手なのか、ツキがないのか、わからないが、あまり愉快ではない。日本はツメ込みでもしているのではないかと、あげくの果ては疑ったりする。そして、ああ、強いはず、昼間寝ていて、夜マージャンに備えている国が日本だからという、変な結論にもって行こうとする。要するに、GNPの一パーセントしか軍事費をだしていないということである。他の国に守ってもらって、他の国に三千世界の鳥を殺してもらって、じっと

昼寝をしていて、夜マージャンだから、勝つのもっともという、ヒガミ、ネタミ、ソネミ、そしてウラミとなってくる。

だから、たまにはホーチャン（相手にふり込む）してやらなければならない。アメリカやE Cが、ヤーマタ！とさっさと帰ってしまうと日本は困るのである。日本はマージャンを打ち続けなければならない。その稼ぎで食わなければ一家心中しかないのである。むずかしいのです。

よ  
る

六時ごろウォール街から、ミッド・タウンに出る。たいてい、ウォルドーフ・アストリアホテルあたりで、日本の会社とか銀行の、支店長交代パーティーが行われる。

酒は二年前にやめてしまったので、フランスから輸入しているペリエを飲む。これがアメリカで大ヒットしている。日本でも売っているが、氷を入れて、ライムをたらすと、ちょっとアルコール類を飲んでいるような錯覚におちいる。

見たような顔があちこちにいます。出席者は日本人半分、アメリカ人半分の場合が多い。日本料理屋がスシ、ソバ、オデン、スキヤキの屋台を出している。スシの屋台の前にアメリカ人の行列ができる。あの生の魚をよくもこんなに食べると思われるほど食べる。変わったものだ。

いまニューヨークに寿司屋だけで二〇〇軒あるといわれている。

アメリカ人は、この立ちんぼのパーティーが大好きである。いろいろな人と自由に話せるからという。

二人のアメリカ人が話をしているのに割り込む場合、①二人とも横に並んで話している、②はすに並んで（約九十度）いる、③相對峙している、という、いろいろな型がある。①の場合には、スッと近より、「ハロー」と切り出せる。②の場合には、ちよつとたたずんで、様子をみる。先方の目にこちらの姿が必ず映るわけだから、先方の目がこちらを見たら「ハロー」と行く。③の場合は、きつと何か真剣に話しているに違いないので、どうしても割り込みたかったら、十分ほど待つつもりですぐそばにいる。しかし聞き耳をたてているような様子をすると失礼にあたる。

パーティーでは、大した話はできない。それでよいのである。人を知るために集まってくるのだから。

主催者、すなわちホストもアメリカでのパーティーは大変である。アメリカ人の場合には、「ベリ・ナイス・オブ・ユー・トゥ・カム」(Very nice of you to come.) といって握手し、次が日本人だったら、「ありがとうございます」といって、おじぎをしなければならぬ。しかし、てっきり日本人だと思っても、アジアの他の国の人かもしれない。

アメリカ人が主催するパーティーであると、五時から八時までであれば、五時から、せいぜ